東南アジア大陸部における民族間関係と『地域』の生成

1．研究組織

研究代表者：林　　行夫（京都大学東南アジア研究センター・助教授）
研究分担者：高谷　紀夫（広島大学総合科学部・助教授）
　　長谷川　清（岐阜教育大学外国語学部・助教授）

2．研究のねらい・目的

シャン、ラオ、タイ・ルーをはじめとする東南アジア大陸部におけるタイ系諸族は、他の言語集団に比べ分布領域が塊状をなして連続する。このことが歴史的に成立してきた様々な政治的単位の同質性と異質性を際だたせており、その比較研究の有効性の根拠をなしている。本研究の主たる目的は、タイ系諸族を中心に、諸民族がそれぞれ帰属する国家、さらには周辺国家の影響を視野にいれた社会・文化的複合についての比較研究をとりまとめ発展させると同時に、国境を越えて展開する東南アジア大陸部全体の「地域」の生成論理と民族間関係に関する基礎的な理論研究に寄与することにある。平成８年度でも、このような平成７年度の高谷紀夫班での研究目的・ねらいをそのまま引き継ぎ、研究分担者のみならず、最近現地調査を実施した研究協力者の報告発表を可能な限り数多く実施するとともに、前年度で浮かび上がってきた民族、歴史、地域の捉え方について検討を加え、その途上の産物を研究分担者がそれぞれの論考として成果報告書に盛り込むことが課題となった。

3．平成８年度の研究経過

開催された研究会は以下の５回である。来日していた雲南省民族学院民族研究所の劉剛氏の西南中国側からの見方にもとづく報告を皮切りに、最近長期のフィールド調査を終えて資料をとりまとめつつある研究者を研究協力者として迎え、新しい知見をもとに活発な研究会活動を展開させることができた。扱われた民族はタイ系諸族およびその隣人関係をとりなしている他民族（カチン、リス、アカなど）と多岐にわたったが、とりわけ、過去数十年のあいだほとんど資料蓄積が途絶えていたタイ北部地方と境を接する、西南中国、ビルマ国境地域についての

報告が重なり、相互の意見交換を通じて同地域における近年のダイナミックな様相が、きわめて鮮明になってきたことは収穫であった。ただし、東南アジア大陸部では2年間を通じてカンボジア王国のみ取り扱うことができなかった。今後の現地調査の進展がまたれるところである。以下、それぞれの研究会での報告を概観する。

第1回研究会（96.4.19／於京都大学東南アジア研究センター）

「雲南における民族間関係と生態系」劉 剛（雲南省民族学院民族研究所）

雲南省は中国西南部における多民族省の典型に数えられ、垂直的かつ水平的な気候差にとむ多民族地域を基本単位としている。本報告では、劉剛氏自身の近著『発展的選択 ── 社会文化変遷途程中的雲南民族集団 ── 』（雲南民族出版社、1996）で展開された論点を要約しつつ、雲南省の民族間関係と生態系の関係、とくに漢族が進出する歴史的過程で「農耕化」と概念化される漢族の農耕形式が導入されることにより、少数民族地域の生態系が劇的に変容していることが明らかにされた。それは、政治、社会、文化などの面で「漢化」を招く要因となっており、民族間関係（とくに漢族・少数民族関係）の近年での動態を決定づけたこと、さらに環境変化の歴史的要因にもなってきたことについて、いくつかの少数民族社会を事例として検証された。「農耕化」という概念の含意をめぐって、また、その概念運用の妥当性についても活発な議論が行われた。

第2回研究会（96.7.12／於京都大学東南アジア研究センター）

「東北タイの治療師モーラム・ピーファー ── 天上霊信仰とその継承」加藤真理子（コーンケーン大学）

加藤氏は、コーンケーン大学大学院修士課程に提出したタイ語修士論文を素材に、従来、呪医としての社会的機能のみに着目されてきた女性治療師モーラム・ピーファーの実態について、自らの現地調査資料にもとづく報告を行った。国家や地域を越える民族間関係に関するする議論とは直接重ならないものの、東北タイ農村で女性が果たす村落レベルの実践宗教の詳細な事例を通じて、従来とは異なる男女の儀礼的関係を明らかにすると同時に、男性優位のタイ国上座仏教にあって、個別の地域社会にねざす女性優位の信仰が展開させる社会関係、およびそこから透視される東北タイの地域像を提示するものであった。局地的な分析に終わっているため、さらなる広域調査での検証が望まれた。

「ベトナム中部高原少数民族と周辺地域」中田友子（民博総研大）

中田氏は、ヴェトナム中部高原の少数民族集団を中心にその民族間関係の歴史的現実について報告した。同地域は、一般に周辺の諸国家から特に政治的・社会的に独立し、いわゆる「未開社会」あるいは「未開人」の地域とされてきたが、現実に周囲の社会といかなる関係をもっていたのかを19世紀後半から20世紀前半に記された文献資料に基づいて検討した。とりわけ、同地域の山地民の交易 ── 山地民同士の交易と山地民と他の平地民との交易 ── ネットワークと、そして少数民族集団の一つであるジャライ族の「火の王・水の王（プタオ）」をめぐる同地域の内外での多様なネットワークについて言及された。交易については、中部高原の山地民はたんに必需品を入手すべく平地民との交易を行っていたというよりは、ヴェトナム、中国という東の世界と、カンボジア、シャムという西の世界の二つの交易圏の両方に別々に組み込まれ、前者に対しては稀少価値をもったさまざまな山林資源を、後者に対しては恒常的に不足している労働力を奴隷という形で輸出していたのではないかという仮説を提出した。また、プタオをめぐるネットワークに関しては、カンボジア宮廷やヴェトナム皇帝との従来からの贈物交換や、一種の朝貢関係の存在から、例えば中国皇帝の東南アジア版を標榜するベトナム阮朝皇帝の世界観の中でジャライは朝貢国の一つであったというだけではなく、より現実的に中部高原がシャム、カンボジア、ヴェトナムといったインドシナにおける国家間の軍事的、政治的せめぎあいの中で、一種の「緩衝地帯」的位置にあったのではないかと推測した。史資料が限定されており、議論の裏付けに無理があるという指摘があったが、中田氏の狙いは一般に「未開社会」とまなざされてきた地域を時空間的によりマクロな視点でとらえた場合、異なる現実の位相が顕在化する可能性を探るものとして評価される。

「守護霊祭祀と『歴史』の記憶 ── 中国徳宏地区タイ・マオの事例から」長谷川清（岐阜教育大学）

長谷川氏は雲南省・徳宏タイ族チンポー族自治州を中心に居住するタイ系民族（タイ・マオ）を事例として、エスニシティの動態について予備的な考察を試みた。中華人民共和国の成立以降、実施された「民族識別工作」により雲南省内に居住するタイ系民族には、西双版納地区を中心に分布するタイ・ルー、徳宏地区を中心に分布するタイ・ヌーなど、いくつかの下位グループの存在する点が明らかになったが、それらのエスニック境界、自己意識の編制、境界維持のメカニズムなどについてはいまだ不明な点が多かった。雲南・東南アジア大陸部のタイ系諸族のエスニシティをめぐっては、M. Moerman による北部タイのタイ・ルーを対象とした研究

などの分析視角を批判的に継承し、ビルマ、ラオス、中国などの状況をも視野において比較検討する方向が出てきている。報告では、徳宏地区のタイ系民族にかんする自称、他称が併存しあう状況を各種の文献資料の記述からつきとめ、ムアンの守護霊祭祀、ムアンの起源伝承、歴史的記憶などを手がかりに、彼らの伝統的な政治単位＜ムアン＞がタイ系民族の自己意識の生成と内部的分化にいかにかかわりあうかを検討した。

討論は、タイ系諸族をめぐる民族間関係と「歴史」の記憶のかかわる諸問題に集中した。ムアンの守護霊祭祀の起源伝承における地域差をどのように解釈すべきか。研究者を含む外部からのまなざしにより対象化され、言説化された、ある集団の歴史は内部で「生きられた歴史」とは異なる。求められなければならないのは、外部／内部の交錯する磁場に作用する権力作用やその力学的過程によって浸潤してゆく「歴史の生成」の磁場で起きていることを記述することではないか、といったものである。

第3回研究会（96.12.20／於京都大学東南アジア研究センター）

「北タイ・シャン社会における民族間関係と宗教」村上忠良（筑波大学）

東南アジア大陸部における今世紀初頭の近代的な国境の導入は、国境の内側を「国土」とし、そこの居住者を「国民」として登録管理するための国境行政の範囲を確定することで「国土」と「国民」を創出した。この結果、同地域に広く分布する諸民族は複数の国民国家に分断された。村上氏は、近代的な国境という制度がローカルな地域社会で運用されるときに、いかなる状況が生まれるのかについて、自ら行ったタイ北西部のシャンでの長期調査で得た事例に基づいて報告した。山がちなタイ国北西部地域は、近年まで近隣勢力の政治支配が余り及ぶことのない「フロンティア」であり、シャンをはじめとする様々な民族の移住は現在も続いている。同一民族で同じ地域に住みつつも、タイ国民であるか「不法入国者」なのかで、政治経済的な立場が異なり内部分化されている。比較的古くから入植したシャンはタイ国籍を持つが、近年移住してきた者はタイ国籍を持たず、先行者から「外のタイ（Tai）」と呼ばれる。彼らはタイ政府にとって「不法入国している外国人」であり、タイ国民としての権利を持たず、行政サービスから制度的に排除されている。タイ国籍をもつシャンは、タイ国民の一人として積極的にタイ社会内での地位上昇をめざす求心的な志向を持ち、国籍を持たない「外のタイ」はタイ国よりも国外（ミャンマーのシャン州）との繋がりを求める遠心的志向を持つ。ただし、両者は完全に分断されているわけではなく、婚姻、労働関係、儀礼上の親子関係で繋がってもいる。村上氏は、両者を繋ぐものとして得度式に見られる儀礼上の親子関係に着目しその相互関係を

考察する。シャンにとっての得度式は、男子の通過儀礼の意味以上に、得度する息子の親の社会的地位上昇の機会として捉えられている。親は息子の得度式の費用をだすのが一般的であり、自らの息子を得度させたかどうかが社会的関心事となる。また、他人の子供の得度のスポンサーとなることもある。このスポンサーと得度する子供は「得度の親子」とよばれ、儀礼を通した擬制的な「親子」関係を結ぶ。興味深いのは、一般に「得度の親」はタイ国籍を持つ富裕層のシャンで「得度の子」が経済的に貧しい家庭の子弟および「外のタイ」である事例が多い。それゆえ、現在のタイ北西部の得度式において形成される「得度の親子」の関係は、遠心化していく「外のシャン」や社会的な周縁に置かれた人々を内部へと緩やかに定着させていると指摘する。

求心・遠心の指標は現実を単純化しすぎ、国境を往来する双方向性に注目すべきだという指摘があり、婚姻での両者間の関係、儀礼に対するふたつの見方についてのさらなる検討が必要とされた。儀礼の「排除、差別化」作用と外部者を内部へと包摂する側面について理解を深めることも課題とされた。

「ビルマ辺境における多民族社会の動態」吉田敏浩（Asia Press International）

昨今のわが国における人類学的研究においては、北ビルマのカチン州、シャン州、カヤ州をまたいで例外的ともいえる長期の従軍フィールド経験（1985年～88年）をもつ吉田氏は、同地域に住む30以上の民族の生態と民族間関係について報告した。カチン人など山地で焼畑をしている民族とシャン人のように平地で水田を営む民族の間には、平地の村の五日市で売り買いをするなど交流がある。シャン人の水田稲作の技術に影響されたカチン人などが、平地に下りて水田を開くこともあり、いつしかシャン人に同化する場合も見られる。北ビルマの諸民族のほとんどが、中国やタイなど隣国にもまたがって住んでいる。元々かれらがいた地域に後から国境線が引かれたせいでもあるし、国境を越えて移住する人たちもいるからだ。例えば、カチン人における氏族の絆やシャン人における仏教などのつながりを通して、同じ民族同士の国境を越えた関係は根強く続いている。また、異なる民族の間でも、宝石などをめぐる国境交易や、カチン人とインドのマニプール州に住むメテー人の民族自決運動の協力関係など、交流がある。

多民族国家ビルマでは、多数派のビルマ人中心でしかも軍部が実権を握る政府が中央集権支配を押し進めたため、自治権を求めて闘うカチン人やシャン人など少数派の諸民族と政府の間で、内戦が続いてきた。少数派の諸民族は共闘関係を結んだ。しかし、民族間あるいは民族内

での葛藤がないわけではない。例えば、20以上の民族が住むシャン州では、シャン人が多数派で独立・自治権運動の中心になったが、他の民族がそこから分かれて独自の民族組織をつくる場合もあり、対立が起きたこともあった。また、カチン人のなかにはジンポーやラワンなど七つの言語集団があるが、民族内の多数派にあたるジンポーが独立・自治権運動の中心になったため、それに反発するラワンの住民とカチン独立軍ゲリラの間で抗争が起きたりもしている。つまり、国家のなかでは少数派になる民族がある地域では多数派となり、地域内の他の少数派の民族との間に軋轢が生じる現実がある。少数派の民族のなかでも、言語集団間や氏族間で多数派と少数派に分かれることがある。また、カチンの言語集団間の対立の場合、独立・自治権運動に積極的なグループと消極的・対立的なグループでは民族意識の面で違いが見られる。前者はカチン民族意識が濃いが、後者は薄く、むしろ抗争の結果として自分たちはカチンではなくラワンという別の民族であるとの意識も高まっている。その高まりはビルマ国民の浸透も伴っている。ここでは、時の政治や社会の情勢によって民族意識・アイデンティティーの変容は常態になっている。吉田氏は山岳地帯や高原で自然のリズムに調和した生活をする村人にとって、民族意識や国民意識は相対化されてきたという。同時に、国家への抵抗の過程で民族意識が形成されていったと強調した。

印象的な報告を吉田氏は次のようにしめくくる。自然の循環・風と水のリズムにしたがって生きてきた人びとは、本来国家制度を必要としなかったはずである。しかし、国家制度とも無縁ではいられなくなった。自らの文化や心の根を失わずに生き延びるには、時代の流れに応じた政治と経済への関わりも必要だろうが、焼畑農業の知恵に見られるような、生命の営みの土台である自然のリズムへの調和を忘れないことが大切なのではなかろうか、と。

第4回研究会（97.1.25／於京都大学東南アジア研究センター）

「商人としてのアカ族 ── 国境を越えたネットワーク ──」豊田三佳（ハル大学）

豊田氏は近年急速に増え続けているチェンマイ都市に移住している北部タイの山地民のなかでもアカ族を対象に彼らのアイデンティティの現代的な様相について報告した。ユニークな点は、調査対象を若い世代、特に女性に焦点をあてたことである。また、都市を拠点とすることにより先行研究とは異なるアプローチから彼らの移動とネットワークのダイナミズムと帰属意識を捉えようとした。質問票による343の事例調査は、アカ族のより良い生活を求めての移動を前提とする生活形態は地理的に拘束されることなく非常に流動的であり、さらに都市流入の始まる以前から村単位のみならず個人、家族単位でも不規則に行われていることから、都市へ

の移動はその延長線上に位置づけられることを示した。この意味では、彼らにとっての都市と農村の地理的境界線はファジーなものである。アカにとって「都市 vs 農村」あるいは「平地 vs 山地」という領土を二分する分析枠組はさほど有効でない。さらに、アカ族の個人レベルでの人と人の Social Networks に注目しそれぞれの場面場面における仲間意識、役割期待について実際の行為を分析すると、都市生活者にとって共通の利益／経験を共有するのは学校あるいは職場を通して知りあった人間関係である。また、家系譜それ自体が排他的に集団的アイデンティティーを形成するわけでもない。実際のところ家系譜に包含されない人々（族外婚した女性／他民族の養子になった子供）は過去も現在も多く存在している。交易活動を通しての他民族との接触、影響を考慮するとアカ族アイデンティティーの曖昧さは明らかである。都市に住むアカ族のアイデンティティーの様相はアカ族というカテゴリーからタイ人というカテゴリーへの移行という枠組では捉えきれない。彼らにとって 'self' とは接する相手との力関係、状況で、またライフステージを通して常に変化し続けるためである。また、タイに入国した少数派後発組（ Ubya Akha ）が多数派先発組（ Ulo Akha ）よりも政治／経済力をもつ現状があり、若い世代の間で進むキリスト教化は彼らに外国語を学ぶ機会そしてあわよくば台湾での雇用チャンスに結びつく機会をも提供している。この過程において、アカ族においては民族アイデンティティーというよりむしろ商人としての職業アイデンティティーが顕在化しているという。

「リスがみたリス ── タイ北部リス族のフォーク・エスノロジー ──」綾部真雄（東京都立大学）

綾部氏はタイ北部山地民リス族をとりあげ、彼らの folk ethnology すなわち彼らが自分自身の社会をいかに捉えて分類しているのかという部分を恣意的に切りだして考察する。従来のリス族研究ではリス族内部のサブ・グループ分類に言及する場合、漢族の主観的観点からの旧弊な分類が使用されることが多く実情には即さない場合が多い。そこでリス族自身が自己の社会をどう分類しているのかをみていく必要性が生じる。ただし数カ国に跨って分布し、相互認識を欠くリス族の人々に汎リス族的な視点からの分類を提示させることは不可能であり、彼らのローカルな知識と研究者の鳥瞰図視点の融合が必須であるとする。綾部氏はリス族のフォーク・エスノロジーを非民族学的認識（ Non Ethnological Cognition ）と民族学的認識（ Ethnological Cognition ）に大別しそれぞれの内容をみた。前者ではそれを地理＝生態学的分類、自系列的分類、イデオロギー的に機能するクランを中心とした分類の三つに分け、民族的出自に基礎を置かない「人間」分類もが現地で一定の意味を持つ。後者では、一面的に見られがちで

内部分類を欠くかのごとく考えられてきたリスの人々が、実際にはサルウィン川を中心とした相応に複雑な分類体系を発達させ、多様な内実を持っていることを明らかにした。ただし上記の分類は、今なお有効性を持っているとはいうものの、近代国民国家システムの副産物である「国境」が影を落とす以前の「原形」に近いものであり、現実にはそこにリス族の新しく生じた国境認識が絡んで複雑化している。その例を示す例として、リス族の人々の認識体系のなかでサルウィン川と国境という「自然」対「恣意」の対立をなす二つの異なった基準線が概念的融合を起こしている状況を敷衍した。リス族の認識体系が国境の関与により大きく変容していくのと同時に、タイ国内に住むリス族はひとつの大きな局面を迎えている。彼らは現実的には多様な背景を持つ人びとであるが、国境に囲い込まれて住むことにより地理的な凝集性を付与されると同時に、ホスト社会であるタイ社会による行政的な包摂を受けるなかで、絶えまない情報や物質文化の流入にさらされ、一種の文化的斉一性を身につけつつある。

綾部氏の意図は、複数のローカルな分類体系を研究者の視点から統合することにあったが、このような分類が「誰のための」そして「なんのための」分類なのかが不明瞭であるという指摘がなされた。また、「タイ化」や「タイ性」という用語をめぐって、その内容がアイデンティティ面でのタイ化なのか、物質・消費文化の流入によるタイ化なのか、他にも、アイデンティティにおける主観と客観の問題、現実の国境画定と国境認識の「ずれ」の問題など多くの視点が提出された。

第5回研究会（97.3.28-29／於博多市）

本稿執筆時点ではまだ実施されていないが、すでに次のような報告題目が決まっている。研究代表者の林を除く研究協力者の三名は、いずれも長期の現地調査からもどり、それぞれ以下に概略紹介するような重要な報告を準備している。

3月28日（金）

「雲南省徳宏ダイ族にかんする調査報告」長谷千代子（九州大学）

「エスニックシンボルの創成と対応－西南中国トン族の事例」兼重努（京都大学）

3月29日（土）

「山地民と林業政策 ── ビルマ・バゴー山地のカレンと『森林村』制度」谷祐可子（筑波大学）

「総括と展望 ── 『民族』と『地域』の生成文法をめぐって」林行夫（京都大学）

「総合討論」

「成果刊行についての打ち合わせ」

長谷氏は、昨年実施した徳宏地区ダイ族における安居明けの仏教儀礼の調査資料を中心に、タイとの比較を試みつつ、国境を越えるタイ族と上座仏教の相関のなかにうまれている地域性について検討する。兼重氏は、2年半におよぶトン族社会の調査から、解放後につくられてきたトン族のイメージ形成過程を今日トン族の民族象徴として定着した物質文化（風雨橋［屋根付きの橋］や鼓楼［搭状の集会所］）との関連で解明しつつ、さらにこうした流れのなかでトン族自身の対応の様態についても報告する。谷氏は、ビルマで林業政策が本格化した１９世紀から今日までを扱い、バゴー（ペグー）山地のカレン人社会を舞台に、イギリス人によって始められた「森林村」という制度がカレン人の生活にどのような影響をもたらしたか、またそうした制度が採用された背景は何であるのかを問いつつ、現地調査での成果を援用しつつ、地域の生成と林業政策の関係を分析する。また、研究代表者の林は、自ら扱ってきたラオ人社会の生成と変容を題材としつつ、2年間にわたる研究会で討議されてきた民族と地域、歴史と国家にかんする問題点を整理し、総括を試みる。さらに、参加者全員による討論、すでに公刊された成果報告書には掲載されなかった発表報告を中心とした成果刊行にむけて、その編集方針などについて打ち合わせる。

4．研究の成果とフロンティア

本研究班は二年にわたり総回数10回の研究会を開催した。最初に、この研究班が主催する研究会が若手研究者がとりまとめつつある民族誌的資料を、存分に提供、交換、議論できる場として、多くの参加者を集めることになった点を指摘しておきたい。回を重ねるごとに、討論の時間が予定を過ぎることは常態となった。そういうフォーラムとして予想外に大きく成長してきたことは、まず何にも代え難い成功であった。上記の個々の報告概略が示すように、これまで扱われた論点は多岐にわたる。それらの議論を個々にふまえて、研究代表者と研究分担者と常時参加した研究協力者をあわせて4名がそれぞれ論考をよせ、成果報告書シリーズの一冊（No.26）として『東南アジア大陸部における民族間関係と「地域」の生成』をとりまとめた。執筆者、目次内容は以下のとおりである。

編者（林　行夫）　はしがき

林　行夫、高谷紀夫、長谷川清　「東南アジア大陸部における民族間関係と『地域』の生成について」

高谷紀夫「『シャン世界』とその脈絡」

林　行夫「ラオ人社会をめぐる民族・国家・地域」

長谷川清「上座仏教圏における『地域』と『民族』の位相 ── 雲南省、徳宏タイ族の事例から」

馬場雄司「タイ・ルーの移住と精霊祭祀［概況］ ── 北タイを中心に」

本研究班は、総括、総合討論を含む最終の研究会を残しているために、ここで研究の成果を総合的に示しておくことは時期尚早であるが、昨年度から継続して明らかになってきた論点についてのみ、以下に記してかえたい。

昨年度においても、民族の所在を示す立場について議論があったが、今年度においてはさらに個々の事例、主題において、それぞれの社会状況に生きる人びとの地域認識の重層性がいっそう具体的に明らかになってきた。これに関連して、フィールドにおいて交錯するさまざまな「まなざし」をいかに捉えるかという昨年度来の問題は、まなざしを送る側が認知する地域、およびそこに多様なくらしを営んで重層的に構築されている複数の地域が重なる点において議論されるべきだ、という論点に集約されてきた。そして、それぞれの「地域」を立ち上げている諸力の属性を、歴史的、政治的、文化的に明らかにする方向性がきわめて明確になった。もっとも具体的にそれを示すのが、国家が制定する国境をめぐって当該地域住民が対応・対抗しつつうみだしている「同一民族」の「異質な現実」の様相の分析である。綾部報告での試みは、その積極的な一例を示すものである。

前年度でさほど取り上げられることのなかった問題は、変貌する個々の地域の歴史的、現在的な動態、変容に関するものである。「地域」には客観的にきりとられるものと、自己認識の産物として生まれるものを区別していたが、その外縁の所在は無限に存在するとしても、具体の土地は現実に破壊され、その景観を著しく変えてゆく。劉剛氏の議論は、在地の側の立場からの地域の変貌を民族間関係のなかで考察した貴重な報告であった。そこで焦点となるのが、地域、民族をよりおおきな、そしてよりシステムとして合理的に包摂する国家と国家間の関係である。これは国境という人工物をめぐって、民族の自己意識と地域の多元的現実に連関する問題を直接つきつける。具体的には政策とその実施の経過が及ぼす影響になるのであるが、そのベトナム中部高原での歴史的再構築を試みた中田氏、国境を越えるシャン人の現状を追求した村上氏の報告やカレンをめぐる谷氏の報告（予定）などは、問題点を明らかにする豊富な事例を提供した。

さらに、タイ・ヌーの伝統的な政治単位＜ムアン＞がタイ系民族の自己意識の生成と内部的

分化にいかにかかわりあうかを検討した長谷川、商人としてのアカ族のアイデンティティを指摘した豊田は、昨年度においても議論されたある民族をめぐる民族間関係と「歴史」の記憶にかかわる問題を直接、間接的に再提起するものだった。語られる歴史の地域差を解きほぐす作業は、研究者を含む特定地域の対象化作用において「生きられた歴史」（翻っては「生きられる歴史」）をみいだすために、いかに外部／内部の権力作用が交錯する力学的領域をとらえてそれを記述するかという点にかかっていることが再認識された。

本研究班の活動を通して顕在化したいまひとつの論点は、東南アジア大陸部において、国民国家を構築する側の論理が実際の政治的力として地域や民族をつくりあげてゆく側面と、同時に、そこから外れて制度化から取り残される領域、ないし国家によって包摂されつつあるようにみえながらそれを回避しつつ、生成維持されている人びとのくらしの現実、あるいは脱制度化、脱国家化しようとする生活世界の生成への着眼であった。吉田氏の報告は、雄弁にそれを伝えるものであった。その生成のメカニズムの解明は、民族間関係の実相と「地域」の生成を具体のフィールドにおいて考察するために、国家の権力作用の実際的影響の分析とともに今後さらに推進されなければならない。ある異文化ないし地域を考える研究が、初期人類学のように非キリスト教世界ないし非西欧世界と認識された世界領域への着眼と踏査に出発点を与えられていたとするならば、本研究班の立脚点も個々の研究者がそれぞれに現在のフィールドをおおう状況のひとつとして、そうした脱制度化の過程を認識していたことにあるのかもしれない。とすれば、本研究班は「地域人類学」というものを実践していることになるのかもしれない。

これまでに発表された成果は、基本的に発表者が報告にもとづく論文原稿としてとりまとめ、それらを編集した何らかのかたちでの『総括集』として次年度中に公表する予定である。すでに具体的な作業計画が開始されている。また、重点領域研究の一環としての公募研究班の活動は今年度をもって終了するが、今回与えられた二年間の活動期間に生まれたネットワークは、今後さらなる発展を遂げるべく、形を変えて実施されうる研究計画を立案しつつある。代表者、分担者はともにその実現にむけて検討しつつあり、研究活動は形をかえて継続されてゆく見込みであることを記しておきたい。

5．研究業績（平成８年度発表分）

林　行夫

「儀礼と世界観」綾部恒雄・石井米雄編『もっと知りたいカンボジア』弘文堂，pp.112-128, 1996.

「南ラオスにおける民族間関係」綾部恒雄・石井米雄編『もっと知りたいラオス』弘文堂，pp.80-

92, 1996.

「上座部仏教の国タイの今日」『国際文化研修』4（2）: 27-32, 全国市町村国際文化研修所. 1996.

"How Thai-Lao Dominancy was constructed in Northeast Thailand: From their Neighbors' Point of View," paper presented at the Workshop of 'Dry Areas in Southeast Asia', Kyoto, pp.1-23, 1996.

「ラオ人社会をめぐる民族・国家・地域」林　行夫編『東南アジア大陸部における民族間関係と「地域」の生成』（文部省重点領域研究「総合的地域研究」成果報告書シリーズ26), pp.30-78, 1996.

「信仰 ── ウィサー・境界・地域 ── 」『総合的地域研究』14号: 21-22, 1996.

「国教への道程 ── カンボジア仏教の再編をめぐって」『カンボジア研究』5（坂本恭章先生退官記念論文集),（印刷中).

高谷紀夫

「社会生活」フジタヴァンテ編『ミャンマー ── 慈しみの文化と伝統』東京美術, pp.90-95,1997.

「仏塔・仏塔祭り・年中行事」フジタヴァンテ編『ミャンマー ── 慈しみの文化と伝統』東京美術, pp.74-79, 1997.

「『シャン』世界とその脈絡」林　行夫編『東南アジア大陸部における民族間関係と「地域」の生成』（文部省重点領域研究「総合的地域研究」成果報告書シリーズNo.26: 12-29, 1996.

「民族」「入仏門式」田村克己・根本敬編『ビルマ読本』河出書房新社,（印刷中).

長谷川清

「民族間関係と『歴史』の記憶 ── 徳宏タイ族のエスニシティと民族的境界をめぐって」国立民族学博物館国際研究集会（抄録）『中華民族多元－体論と中国における民族間関係』国立民族学博物館, 1996年10月11日～12日, PP.34-35.

「上座仏教圏における『地域』と『民族』の位相 ── 雲南省、徳宏タイ族の事例から」林　行夫編『東南アジア大陸部における民族間関係と「地域」の生成』（文部省重点領域研究「総合的地域研究」成果報告書シリーズ26), pp.79-107.

「『跨境民族』の形成と民族的境界 ── 雲南省・徳宏地区、タイ・ヌーの事例から」塚田誠之ほか編『中国大陸南部における諸民族の移住とエスニシティ』平凡社,（印刷中).

「民族間関係と『歴史』の記憶 ── 徳宏タイ族のエスニシティと民族的境界をめぐって」周達生・塚田誠之共編『中国における諸民族の文化変容と民族間関係の動態（仮題）』国立民族学博物館,（印刷中).